

参考資料

一色干潟 ー過去の連携した活動の記録からー



一色地先ノリ養殖（早春） 2005年・愛知万博の頃



一色干潟観察会 2007（平成19）年9月9日（日曜日）
開会式（遠方は佐久島）



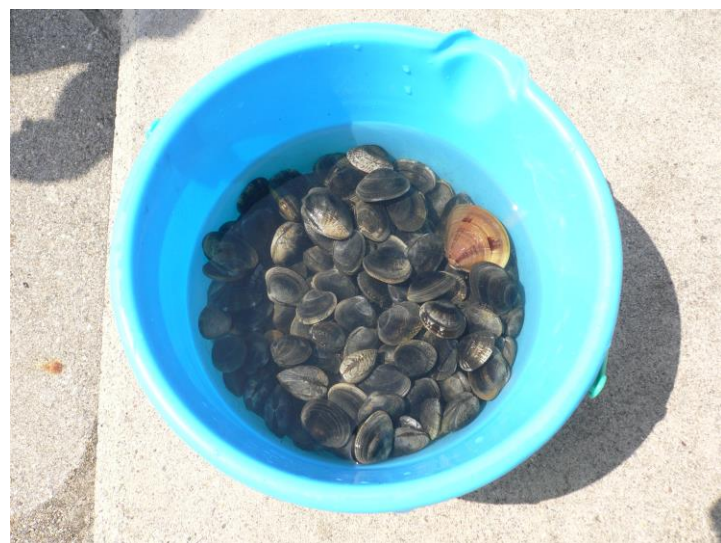
主催：矢作川をきれいにする会
後援：愛知県・一色町・矢水協



一色干潟観察会 広大な干潟



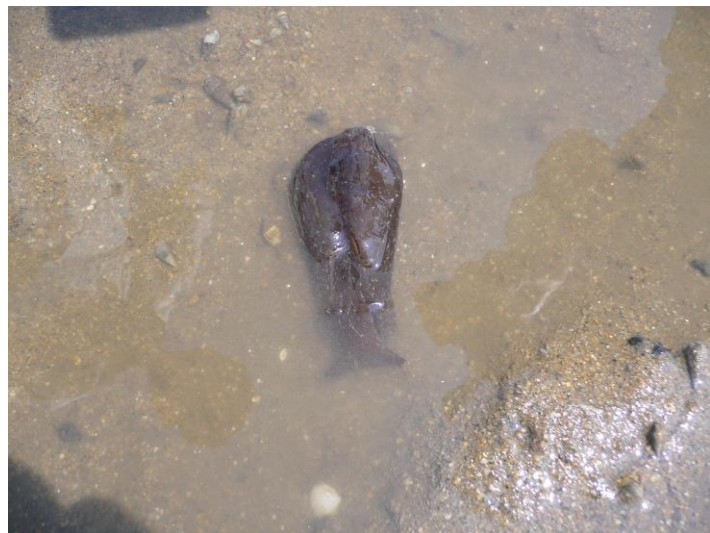
一色干潟観察会 (干潮時)



一色干潟観察会 (採れたアサリ・ハマグリ)



一色干潟観察会（アナアオサに群がるウミニナ等）



一色干潟観察会（アメフラシ、ウミニナ）



一色干潟観察会（岸に上がり採集した生きものを紹介）



一色干潟観察会（採集した生きものを平皿で観察）



一色干潟観察会（採取した干潟の生きものの一部）



一色干潟観察会（干潟の生きものとのふれ合い）



一色干潟観察会（閉会式）
矢作川をきれいにする会（活動総括、感謝のことば）



一色干潟観察会 2008（平成20）年9月14日



下げ潮時に参加者全員で海岸清掃（20分間）、干潮時期に干潟観察
参加者 約150人（子供多数）
矢水協、矢環研（役員・事務局）、中森林研（会員・事務局）参加



一色干潟観察会 2009（平成 21）年 9 月 20 日



下げ潮時に参加者全員で海岸清掃（20 分間）、
干潮時期に干潟観察
この年はアオサが大量に発生・漂着



一色干潟観察会（アサリ漁場・ノリ養殖の場）
生き物調べ

（撮影 野田）



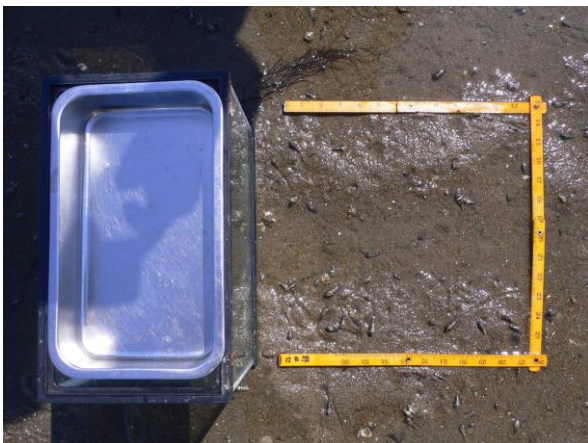
No.1 地点の生物 (汀線から 25m地点、方形枠内 表層 0～-15cm範囲)

緑色海藻のアオサが繁茂していた。今回は、2年前、1年前の観察会時より、繁茂の範囲が広がった。糸状の海藻のオゴノリは、逆に減っていた。また、マクサは今回観察されなかった。海藻に隠れていたハゼの稚魚 2匹が入った。二枚貝は稚貝状態で少し採取できた。



No.2 地点の生物 (汀線から 100m地点、方形枠内 表層 0～-15cm範囲)

昨年と同様に、コアマモの群落が点在しているのが観察された。なお、2年前は観察されなかった。二枚貝はやや大きい稚貝状態で少し採取できた。



No.3 地点の生物 (汀線から 200m地点、方形枠内 0～-15cm範囲)

このあたりから沖に向かってアサリ漁が行なわれている。頻繁に採貝が行なわれているためか、このあたりに海藻や海草の生育はみられなかった。しかし、アサリが豊富に生息し、稚貝から成貝 (約 1年もの) まで多く採れた。

No.4 地点 (300m 先) も採取を予定していたが、観察時間終了のため出来なかった。



一色干潟観察会 2010（平成 22）年 9 月 19 日

（観察会に先立ち会場周辺のゴミ拾いを実施。
前日に中部森林開発研究会が海岸清掃したが、この日も多くのゴミが収集された。）



潮が引くまで、開会式と講話の時間
矢作川をきれいにする会長あいさつ。

来賓（一色町長・町議会議員・漁協組合長、中部森林開発研究会会長）が順に挨拶



前愛知県副知事 稲垣隆司 氏
干潟観察のポイント・干潟の役割を講話



一色干潟観察会 2010

干潟観察後、アサリ汁が全員にふるまわれ、干潟の幸を味わった。
愛知県環境課から三河湾・干潟の環境問題と保全の取組みも学んだ。

赤潮・青潮の発生には、海だけでなく川の上流が大きく関係していることを、子供にも分かるやさしい言葉で説明された。

現地で実際に海岸を清掃してきれいにした後で、干潟の多様な生物に触れ、水循環の大切さ・環境保全の大切さを子供たちが体験して学ぶことは非常に有意義であると感じた。

(矢作川環境技術研究会 幹事会社 (各参加メンバー) の参観レポートより)

矢作川の河口干潟



矢作川河口近く右岸（上流方向）

(2014.8.25)



矢作川河口近く右岸（河口方向）

(2014.8.25)



同上・漂着プラゴミの一部（ペットボトル類）

(2014.8.25)

佐久島の砂浜



佐久島の海岸に打ち上げられたプラゴミ・塵芥（2018.4.15）



同上のプラゴミ・塵芥（2018.4.15）

意見（海ゴミ対策について）

- ・川や海に出たプラゴミは、流域を循環する物質の一つ（サイクルは多岐）と認識されます。このプラゴミは、長期にわたり環境を汚染し、健康・生活環境、生態系に様々に影響することが分かってきました。
- ・川や海は人と生き物の共生の場（伝統・生活・産業文化と密接）と認識し、川や海のプラゴミ、マイクロプラスチック汚染対策は、SDGs への取り組みの中で系統的に構築されることが効果的であろう、と考えられます。
- ・流域が連携し、調査機能（カルテ・評価水準）設定、定期モニタリングスポット（範囲）、評価機能、が提案されます。
- ・まだ概念的ですが、本課題解決（モノづくり流域の共生の品格）への対策行動の矢作川流域圏モデルになって欲しいと思います。

（矢作川環境技術研究会事務局 野田賢司（2021.8.2）